

西之内町地車新調 実行委員会通信

2022年
2月号

新調通信に関する御問い合わせ
西之内町公民館
072-444-7712

西之内町新調地車

彫刻の物語背景と紹介（10）

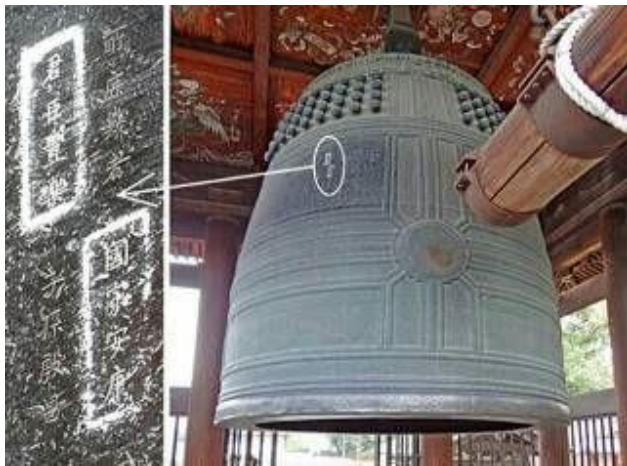
秀頼の決意

二月も終わりに近づく、春の足音が間近に感じられるこのごろ、西之内町の皆様におかれましては、ますますご発展のこととお慶び申し上げます。

今回も新調地車の彫り物の場面について少しご紹介します。主題目である大坂の陣は、家康がとにかく難癖をつけて豊臣家の力を衰弱させることを目的としたもので、戦国期最後の合戦でもあります。その合戦に至る一つの要因として、二条城の会见があります。家康が秀頼の持っている資質に脅威を覚えたためではないかと推測されています。秀頼の当日の振る舞いは、後の文献では記載されておりますが、徳川家びいきの目線で書かれているため、真相は不明です。

その会見後に家康は方広寺鐘銘事件を企てるのです。慶長19年（1614）8月3日、京都の方広寺において大仏開眼供養会が行われることになりました。する

と、家康の懷刀といわれる天台宗僧侶の南光坊天海は、その運営方法に注文をつけます。供養会において天台宗の僧侶を上座の左班にするよう、豊臣方へ申し入れたのです。前回の供養会では、高野山の木食応其の主張を受け入れ、真言宗を左班にしたのでした。しかし、今回は供養導師が天台宗の妙法院なので、天台宗の僧侶を左班にするようにというのが天海の言い分。問題は、天台宗と真言宗のいずれが上座に座る



方広寺釣鐘（現存）

かということだったのです。また天海は、仁和寺門跡が供養会に出席することを強く非難します。そして、天台宗の僧侶が左班でなければ、出仕しないと言います。面倒なことに、家康も堂供養と大仏の開眼供養を同時に実施するのか尋ねたため、問題はさらに複雑化していきます。

この問題に対処したのが、片桐且元です。7月18日、且元は家康のいる駿府城に赴き、供養の日程を午前と午後で実施するという案を提示し、家康の要望に応えようとしています。しかし、天海の主張である仁和寺門跡の排除は拒否しました。ところが事態は収拾しません。今度は家康の信頼が厚い臨済宗の僧侶・金地院崇伝が現れます。

崇伝は、開眼供養と堂供養を2日に分けるべきであると申し入れます。これは崇伝の考えといえども、実質的に家康の意向を受けたものであったといえます。7月21日、家康は大仏鐘銘に「関東に不吉の

語」があり、しかも上棟の日が吉日でないと立腹したことを豊臣方に伝えます『駿府記』。この時点において、立腹した具体的な内容は豊臣家にはまだ伝わっておらず、振り回された且元は、8月3日に開眼供養と堂供養を行いたい、これまでの主張を繰り返すだけになりました。こうなると、話は平行線をたどるだけです。

家康は主張が変わることなく、再び大仏開眼供養と堂供養を別の日に行うように迫ります『駿府記』。

そうしているうちに、方広寺鐘銘事件が起こったのです。

方広寺の鐘銘は、東福寺の長老・文英清韓（ぶんえいせい）が撰したのでありますが、そこに「国家安康」の文字のあることが発覚します。「家康」の2文字が分かれているというところで、家康は強い不快感を示します。ただ、これを問題視したのは林羅山であって、ほかの五山僧はさほど問題とは思わなかったようです。さらに、それ

だけでは終わらず、方広寺の鐘銘には、「君臣豊楽」の文字が刻まれているのです。この言葉は、豊臣家が家臣とともに繁栄していくことを意味すると考えられました。家康の怒りは、さらに増幅したといわれております。この一連の流れが方広寺鐘銘事件の発端です。

方広寺鐘銘事件を経て衝突に至った大坂の陣ですが、秀頼はここで大将としての風格を見せることとなります。

大坂冬の陣が終わりかけていた頃、淀殿は徳川の大量に囲まれ、鉄砲を連日撃ちこまれたために弱気になっていました。

「もし秀頼に何かあったら困る。人が住まない野原に移住してでもいいので、どうにかして秀頼の安全を確保しないといけない。」

この発言を大野治長から聞いた秀頼は、淀殿の意見を無視します。

「女は思慮がないのでそう思うだろう。私は敵がもし総攻撃してくれば、自分も城外に出て華やかに戦をして後世に名を残すようにしたいと考えている。戦は数の多寡で決まるものではない。兵の心を一つに

するかしないかだ。これを味方の兵達に触れ回れ。」

治長が諸大將を集めてこのことを話すと、皆は感激して涙を流しました。

「君君たれば臣臣たり（主君に徳があれば家臣は忠義を尽くす）。誰が命を惜しむものですか。敵が総攻撃をしかけてきたら一矢を放って速やかに討ち死にします。」

このことにより豊臣軍の士気が上がり、結果、冬の陣の和睦に際して有利な展開となるのです。『難波戦記』 途方もない難癖から起こった合戦に戸惑いながらも、大將となった秀頼の奮起の場面を、新調地車に表現しております。



南光坊天海
(明智光秀と同一人物説もある)

新調地車の彫り物

進捗報告

〓兵主神社〓

2月になり、大屋根・小屋根の枘合いの下絵から荒彫りに着手しております。枘合い部分は、兵主神社の伝説や祭神の絵巻物から場面を選択し、物語から人物の配置などを構成しております。各場面とも前例が無く、参考となる錦絵や武者絵などの資料に欠けており、構成の検討には時間を要しました。しかし、兵主神社に伝わる話を紐解くと意外な発見もあります。改めてこの地域の歴史に興味を持っていただけるような構成にしたいと思っております。

素削り、刻みの作業では、大脇、脇障子といった迫力のある部分を手掛けております。脇障子については部材も大きく、作業のやりにくい部位のように感じますが、職人が工房の中で巧みに固定具などを活用している姿も、見学していて感心するところでもあります。

今後の予定では、枘合の芯板、奥板の荒彫りが3月下旬までかかるとのこと。次の工程は、車板部分か虹梁部分に着手することとなっております。また、その他、主屋根のとある部分に、兵主神社の重要文化財を彫り込む予定で、既にその下絵は完成しております。どこの部分に入るかはここで言えませんが、お楽しみにいただければと思います。

新調地車の装飾品

進捗報告

〓交差旗〓

装飾品の一つである交差旗の刺繍の出来具合の確認を行いました。刺繍も金糸、銀糸を巧みに組み合わせでメリハリをつけ豪華さが際立つ仕上がりになっております。また、刺繍の仕上がりも重厚なものとなっております。職人の高い技術力を感じさせてくれます。町名旗、幟についても同様の仕様で制作しており、共に完成時の期待が膨らむ仕上がりとなっております。

その他、纏、吹き散りについても完成に向けて順調に作業が進んでおります。装飾品の完成時には内覧会の開催を予定しております。皆さまにぜひご覧いただきたいと思っております。

